懐かしさとnostalgia：比較美学から感性史へ

津　上　英　輔

序

かつて私は，nostalgiaについて論じた際，日本語「懐かしい」には主体と対象の間の距離が欠けている故に考察の対象としにくいと考え，もっぱら英語の“nostalgia”を扱い，懐かしさを棚上げにした[1]．「あの頃が懐かしい」と言うとき，懐かしいのは対象である「あの頃」であるのか，ここには顕在化していない主体「私」であるのかが明確でなく，それゆえ「懐かしい」ことの在処が確定できないと考えたのである．それについては当然，何人かの方々から不満の声をいただいた．ところがこのたび，日本語文法を参照することで，前論文の誤りに気づき，晴れて懐かしさを感性的質の一つとして考察の対象とすることができると考えるに至った[2]．

本稿の手順は次のとおりである．まず1．でnostalgiaについての前論文の主張に，その後の調査と考察で明らかになった知見を加え，この概念を再検討する．2．では，「なつかしい」という語の文法的解析から，現代におけるこの語の意味内容を画定し，次に歴史をさかのぼって語義の変遷を辿る．

1）　津上英輔「過去の現前：感性的範疇としてのnostalgia」（2005年9月，『美学』222号，pp. 1-13.）．

2）　これには，2年前になるが，当時まだ教授に在職しておられた成城大学国文学科の工藤力男氏に私が質問したことへの氏の懇切なご教示が突破口になった．深い感謝の念を捧げるものである．

その際，「なつかしい」に「懐」の漢字を当て始めたことに注目し[3]，当時の日本人がこの語をいかにとらえていたかを析出する．3．では nostalgia と懐かしさを，それぞれの歴史的変遷を踏まえて比較する．これによって現状における両概念の異同が映し出されるだけでなく，語義変化の方向を各々個別に見る以上に鮮明に見定めることができるだろう．これはさらに，比較美学が感性史構築にとって有効な方途たり得ることの証左ともなるだろう[4]．

1．Nostalgia 概念の起こりから現代まで

1.1．“Nostalgia” の歴史的概観

“Nostalgia” は「帰郷（nostos）」あるいは望郷の「苦（algos）」を表わす造語である．1688 年，ホーファー（Johannes Hofer，1669-1752）がバーゼル大学に提出した医学博士論文で，異郷に戦うスイス傭兵らに見られる特殊な外因性精神疾患の名として提唱された．帰郷への過度の思慕が他の思惟を抑圧することで，動物精気の機能が損なわれ，重篤な場合には死に至るが，帰郷あるいはその期待によって障害の原因が取り除かれるや，いとも簡単に回復するというのである．その後およそ 19 世紀末まで，この疾患は西欧各地に見られた．この専ら負の価値をもつ概念を第一段階の nostalgia としよう．次に 20 世紀に入ると，離郷状態が一般化することと平行して，nostalgia はもはや異常性を失い，同時に，思慕が故郷という空間的対象から過去という時間的対象へ向かうようになる．こうして，外因性精神疾患は万人通有の内因的感情になる．これを第二段階としよう．この nostalgia は，過去をあたかもここにあるかのように思い浮かべることの快と現実には過去

3）この点に関しても，別の機会に工藤氏にご教示いただいた．以下の分析において，純粋和語としての「なつかしい」と，漢字で表記される通用の「懐かしい」とを区別する．無論最終目標は「懐かしい」の方である．

4）感性史については，東京大学における 2009 年度美学会全国大会での口頭発表で構想を述べた．この内容は 2010 年 6 月発行の『美学』242 号に投稿中である．また，その論文と本稿とに一部重複があるのはそのためである．

がここにはないことの苦とが入り交じった，正負両価的な分裂感情である．

ところが現代の英語で，とりわけ大衆的脈絡において，nostalgia はひたすら甘美な感情になり変り，それを喚起する対象の nostalgic な質は正の感性的質と認められるまでになっている．実例として *OED Online* から “Just sit back, relax and inhale that nostalgic vanilla fragrance as you enjoy your sun-downer.（まあゆったり座って下さい．夕暮れ時の 1 杯を楽しみながら，くつろいであの nostalgic なヴァニラの香りを吸い込んで下さい．）” を挙げよう．これは 1995 年の料理雑誌 *BBC Good Food*（Aug. 70/3）からのものであるが，ここでの “nostalgic” に苦の部分はかけらもなく，感情内容にほろ苦さのようなものが含まれているとしても，それも味の一部となって，全体としてひとまとまりの快い感性的質を形作っている．このひたすら正の価値をもつ概念を，第三段階の nostalgia としよう[5]．注意すべきは，これが単なる想像物ではなく，現前の対象に非現前の像を重ねることから生じる，その対象の味わいであることだ．想像は大抵何らかのよす

5） *OED Online* とは *The Oxford English Dictionary*（以下 *OED* と略記）の最新オンライン版で，2000 年以来第 3 版に向けて進められている「改訂案（Draft Revision）」が盛り込まれている．ここに興味深い事実がある．1989 年の *OED* 第 2 版では nostalgia は語源的な精神疾患の次に来る「転義（transferred sense）」として “Regret or sorrowful longing *for* the conditions of a past age; regretful or wistful memory or recall of an earlier time.（過去期の状態への痛恨または哀慕，心残りなまたはせつない往時の記憶または回顧．）” と定義されていたのに対して，おそらく 2003 年 12 月に発表された「改訂案」では根本的に改稿し，精神疾患でない nostalgia は “Sentimental longing *for* or regretful memory of a period of the past, esp. one in an individual's own lifetime;（also）sentimental imagining or evocation of a period of the past.（過去の一時代，特に一人ひとりの人生における過去の一時代への感傷的思慕または心残りな記憶，（また）過去の一時代の感傷的想像または喚起．）” と定義されている．すなわち，第 2 版では “regret(ful)”, “sorrowful”, “wistful” のように苦の感情が前面に出ていたのに対して，暫定第 3 版では “regretful” が一度出現するものの，支配的なのはもはや “sentimental” のほうである．感傷とは（本人にとっての）快の感情だから，この 20 年足らずの間に，*OED* にも認知されるほどの大きな意味変化がこの語に生じたことがわかる．上に引用した 1995 年の用例は無論最新版からのものである．

がを必要とし，またよすがの存在によって強められる．人がそれ自体としては貧弱の極みでしかない鼻歌を歌いながら，ジュピター交響曲を聞いた気になるのは，想像力がそのいわば依代（よりしろ）に立ってこそ羽ばたくことができるからではないだろうか．客観的に見れば，そのとき人は，鼻歌をオーケストラの響きに聞きなしているのだが，主観的意識としてはむしろ，鼻歌そのものに豊かな味わいを感じている．それと同様に，第三段階の nostalgia は，現前の対象に属するものとして味わわれる．すなわちまさに感性的質である．

私の理解する感性的質（aesthetic quality）とは，知覚すればするほど一層よくとらえられる質のことだから，正の感性的質（これは美的なものと言ってもよい）とは，知覚すればするほど一層そのよさがわかるような質である[6]．したがって現代における nostalgia とは，人を引きつける魅力の一つである[7]．

1.2. 英語圏における過去思慕の観念史

ところで，2009 年 10 月に，*OED* に収録されたほとんどの語を網羅する歴史的類語辞典 *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary* が世に出た．この世界初の偉業は，英語の語彙状況を時代ごとに輪切りにすることを可能にする．しかもそのデータは現在英語に関して望みうる限りの厳密性と網羅性を備えているので，類語の存在だけでなく，不在をも根拠づけ得る．索引を使って nostalgia の歴史的類語を探すと，2 つの項目が指示されている．

第一に，語義別分類番号 02.02.20「精神的痛み／苦（mental pain/suffering）」の下位分類「落胆（dejection）」（02.02.20.08）に収められた見出し「憂鬱（melancholy）」（02.02.20.08.02）の一項目として “nostalgia”

6） ここで踏まえているのは，（私の理解する）バウムガルテンの美の定義である．詳しくは津上英輔「感性的認識の完成：バウムガルテン『美学』における美の説明」（2008 年 3 月，『成城美学美術史』第 14 号，pp. 1-13）を参照．

7） だからこそ，nostalgia は様々な商品の「売り」になり，人の消費を喚起する一要因となる．これは堀内圭子「消費者のノスタルジア――研究の動向と今後の課題――」（『成城文藝』201 号，2007 年，pp. 1-20.）から学ばせていただいた．

概念が立てられ（02.02.20.08.02.12），該当する語として“Wehmut 1907-・saudade 1912-・nostalgia 1920-（*transf.*）”が挙げられている．この記載は，憂鬱としての nostalgia を表わす歴史上の語として，Wehmut が 1907 年から今日まで，saudade が 1912 年から今日まで，転義的用法における nostalgia が 1920 年から今日まで用いられていることを意味する．これは「精神的痛み／苦」の下位区分なので，我々の言う第一段階の nostalgia に相当しそうだが，そうではない．なぜなら，まず時代的に見て，精神疾患としての“nostalgia”の用例は，これよりはるかに早い時代にすでに見られ，また，nostalgia の上位区分である melancholy は，現代では「ほの暗い」というような，快のがわにある感性的質の意味を持つからである．現にポルトガル語 saudade は 2. 3. で見るように，日本語「懐かしさ」に近い感性的質を表わす．したがってこの“nostalgia”は我々の言う同語の第二から第三段階にかけてに位置する．さて，同じ見出しで，nostalgia に関わる人として“laudator temporis acti 1736-（*Latin*）（過ぎ去った時の賞賛者）”が挙げられている．ホラーティウス『詩論』に由来するこの句は，原文で現在の物事に不平をいだく老人を指すことから，その否定的意味合いを込めて英語の中で用いられ，この「精神的痛み／苦」の分類に含められていると思われる．すると，過去に惹かれるより，現在への不満の方が強い以上，故郷ないし過去を思慕する感情としての nostalgia からはかなりの隔たりが認められる．同見出しにはさらに，“homesickness”の類語として“Heimweh a1721-・country disease 1726・home(-)sickness 1756-・nostalgia 1770-（*pathology, also transf.*）・nostalgy 1846-”の記載がある．これは時期からしても，明らかに第一段階の nostalgia に当たる．先ほどの“nostalgia”と合わせて，このグループで目に付くのは，1770 年の nostalgia，1846 年の nostalgy を含め，外国語の多さである．一見英語である homesickness はドイツ語 Heimweh の，country disease はフランス語 mal(-adie) du pays の訳語であるから，nostalgia の類語は，本来の英語には存在しなかったことになる．そして第二，第三段階の nostalgia が，まずドイツ語，ポルトガル語という外国語から 20 世紀初めの英語圏に出現したということは，英語圏の人々はそれまでこの感情を持たなかったことを意

味するのではないか．それを確かめるため，第二の類語項目を見よう．

語義別分類番号 02. 01. 11「記憶（memory）」の下位分類「回顧（retrospection, reminiscence）」（02. 01. 11. 03）の見出しに，一項目として「過去への思慕（longing for the past）」（02. 01. 11. 03. 05. 01）が立てられている．それを意味する歴史上の語は“nostalgy 1874-・nostalgia 1900-・pastism 1921-”である．このうち，“futurism”との対比で用いられることがある特殊語“pastism”を除くと，我々の言う第二，第三段階の nostalgia には，やはり類語はないことになる．同じ分類 02. 01. 11. 03 に立てられた動詞の見出し「振り返る，回顧する」に「回顧に耽る（indulge in reminiscences）」の項がある（02. 01. 11. 03. 02）．ここに見える“reminisce 1882-”が，かろうじて第二，第三段階の nostalgia に似ている．この語の今日的意味は“If you reminisce about something from your past, you write or talk about it, often with pleasure.”（*Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary of British English*, 2003）のようであって，この“pleasure”はまさしく第二，第三段階の nostalgia における正の価値に当たる．しかしこの「快」は行為の結果または目的であって，行為本体ではない．しかも興味深いことに，この派生語である reminiscence, reminiscent, reminiscential には，これに対応する「回顧に耽ること（または，ような）」の意味がない．したがって，動詞 reminisce を nostalgia の類語とするとしても，語義の類同性は低い．要するに，「過去への思慕」を意味する語は，nostalgia ないし nostalgy 以外には事実上英語に存在しない．すると，この意味の“nostalgy”の初出用例として OED の挙げる 1874 年のものが，凡そ英語で過去への憧れを表わす発話の文献上初出であることになる．言い換えれば，この時まで，英語には過去思慕を表わす語はなかった．しかも，前類語項目で見たように，20 世紀初めになっても，この感情を表わすのに外国語が用いられなければならなかった．無論，語の不在は思想の不在と同値ではない，という反論もあり得よう．しかし Wittgenstein 風の考え方につくまでもなく，人々が自分の感情を主題にしようとして，それに名を与えずにいられるだろうか．それが多くの人に共通の感情であると意識するならなおさらのこと，名を与えて説明し，それを主題とすることでわかり合おうと努力する人が現

われないとは考えられない．したがってこの語誌は次のことを表わしている．すなわち 20 世紀初めまでの英語圏の人々には，過去を，学ぶべき対象として，または現在との比較対象として，有用性の尺度から見ることはあっても，思慕の対象として意識することがなかった．我々の言葉に直せば，20 世紀初めに当たる nostalgia の第一段階と第二段階の切れ目が，単に nostalgia の一語の出来事にとどまらず，同時に過去思慕という感情の始まりを意味するということである．

2.「なつかしい」の文法的分析と「懐かしい」

2.1. 形容詞としての性質

形容詞「なつかしい」は，古典的活用におけるシク活用に属し，動詞「なつく」と派生関係にある．このことは何を意味するのだろうか．また，「私はあの頃がなつかしい」と言うとき，「なつかしい」という用言に対して「私」と「あの頃」はいかに関係しているのだろうか．

2.1.1. シク活用

日本古典語では形容詞は連用形活用語尾に「ク」を取るもの（白く）と「シク」を取るもの（たのしく）に分かれる．他方，形容詞は「(1) 客観的な事物・事柄の性質（色彩を含む）・状態を表すとともに，(2) 主観的な心に感じる感覚や感情を表す品詞」[8] で，山本俊英はク活用が (1) に，シク活用が (2) に対応すると説いた（1955 年）．これには例外が見出されてそのままでは妥当しないが，なお「多くのク活用・シク活用に，この違いは当てはまる」[9] とも言われる．「なつかし」はその妥当例に相当して，主観的感情・感覚を表わす．さらにそれは，感覚器官における刺激というよりはもっと精神的，全体的なものと考えられるから，「感覚」を排除して「主観的感情」

8） 山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』（明治書院，2001 年，「形容詞」p. 206．佐藤武義執筆．

9） 同書同項目 p. 227，山口明穂執筆．

に限定してよい．ところで，「感情・感覚形容詞」には「一人称以外には使用できないという「一人称制限」」がある[10]．これは現代語にも当てはまる．二人称，三人称主語の場合，「あなた（彼女）は悲しい（痛い）と感じている」において，文の発話者（たとえばこの場合，報告者である私）と感情や感覚の主体（あなた，彼女）は異なっているのに対して，一人称で「私は悲しい（と感じている）」の場合，両者が一致している．この規則は，日本語が形容詞の主観性と客観性をいかに峻別しているかを明らかにしている．そしてこの規則も「なつかしい」には当てはまっている．現に「私はなつかしい」とは言えても，「あなたはなつかしい」とか「彼女はなつかしい」とは言えない．さらに言えば，もし「我々はなつかしい」と言うとして，その「我々」は私と他の誰か，すなわちあなたか彼女かを合わせたものに他ならないのだから，ある曖昧な表現としてはあり得ても，厳密には成り立たないはずである．したがって「一人称制限」とは，詳しく言えば「単数一人称制限」であり，厳密な意味での主観性の謂いである．ところで，この理解は本稿冒頭で触れた「あの頃が懐かしい」の文における主体と客体の関係をも説明する．すなわちこの発話には暗黙裡に主体「私」が了解されている．それは「私」以外ではあり得ないからこそ，言われないのである．ここまでの考察から，「なつかしい」はすぐれて主観的な感情を表わすことが確かめられたとしよう．

2.1.2.「なつく」

『日本国語大辞典』（第二版オンライン版，小学館）は動詞「なつく」を「（馴れ付くの意）馴れて付き従う．馴れ親しむ．親しみよる，慕う．」と定義し，次の８つの用例を掲げている．

＊万葉〔8Ｃ後〕六・一〇四九「名付（なつき）にし奈良の都の荒れゆけば出で立つごとに嘆きしまさる〈福麻呂歌集〉」
＊霊異記〔810〜824〕上・二「其の女壮（をとこ）に媚び馴（ナツキ），壮睇

10）同書「形容詞」p. 459，阿部清哉執筆．この内容についても，工藤氏に教えていただいた．

（めかりう）つ.〈興福寺本訓釈 馴 奈川支〉」

＊源氏〔1001〜14 頃〕若菜上「猫はまだよく人にもなつかぬにや，綱いと長くつきたりけるを」

＊日葡辞書〔1603〜04〕「Natçuqi, u, uita（ナツク）」

＊寸鉄録〔1606〕「上よりちからをそへこころをつけてよくすれば，かたじけなきとおもひてなつくぞ」

＊桐一葉〔1894〜95〕〈坪内逍遙〉三・二「去就定まらぬ天下の諸侯，当家になづきしたがふべきか」

＊不言不語〔1895〕〈尾崎紅葉〉一〇「後には乳母に誨（をし）へられて，姉様と舌怠（したたる）く呼びて，懐（ナヅ）きぬ」

＊銀の匙〔1913〜15〕〈中勘助〉前・三四「学校ぢゅうの生徒が古沢先生古沢先生といってなついてゐた」

『万葉集』『日葡辞書』を除く 6 例で，なつく主体と対象はそれぞれ，女が壮（をとこ）に（霊異記），猫が人に（源氏物語），［下の者が］上（の者）に（寸鉄録），天下の諸侯が当家に（坪内逍遙），「御児（おこ）」すなわち力夫が「姉様」すなわち環（たまき）に（尾崎紅葉），生徒が古沢先生に（中勘助），であって，身分や力関係が下の者が上の者になつくという構造を取り出すことができる．現在ではなつく主体は子供と動物に限られているのに対し，古語ではもう少し広い範囲に適用されているということだろう．一方『万葉集』からの用例は「馴れて付き従う」の語釈に言う空間的な意味を含んでいるだろう．しかるに，身分や力関係も「上下」と表象され，その差はある「隔たり」と感じられる．すると「なつく」は，隔たりのある対象に向かって，その隔たりをあえて超克することを意味すると考えられる．

2.1.3.「なつく」と「なつかし」の派生関係

では，動詞「なつく」と「なつかしい」はいかなる関係にあるのだろうか．まず，「なつく」:「なつかしい」と同じ関係が「ゆく」:「ゆかしい」，「つつむ」:「つつましい」に見られるが，「これらの形容詞は，動詞の表す内容の実現を期待する意味をそれぞれ有している」[11] から，「なつかしい」は「な

11） 同書「形容詞」p. 227，山口明穂執筆.

つくことの実現を期待する」,「なついた状態になりたい」，さらに「隔たりのある対象に向かって，その隔たりをあえて超克した状態になりたい」，最終的に「隔たりのある対象にあえて触れたい」と言い換えられる．何かをしたいとは，厳密に主観的な感情と言えるから，この言い換えは上のシク活用と単数一人称制限の条件を満たしている．

2.2.「私はXがなつかしい」の主客関係

次に，前論文で私が間違っていた点，すなわち「なつかしい」の主体と対象の関係を検討しよう．山口明穂は『日本語文法大辞典』の「形容詞」の項で次のように述べている（pp. 228 f.）．

> 「空が高い」「故郷が懐かしい」の述語は共に形容詞であるが,「が」を伴った「空」は主語,「故郷」は対象語と区別する考え方がある（時枝誠記『国語学原論』昭16,『日本文法口語篇』昭25など）．述語になる形容詞の意味の差によって,「が」の指示する格が違うと区別する考えである．しかし，それに対し，この二文とも，助詞は「が」と共通しているから同じ格（この場合は「主格」である）とする考えもある（橋本進吉『国語法研究』昭23,『新文典別記』昭7）．学校文法では古くは後者の立場が採られたが，最近は前者の立場を採る説も見られるようになった．しかし，この二者の対立は,「名詞・が・形容詞」の構文を「主語・が・述語」とする考えがかえって禍していると考えられる．「電話は昼が安い」「食事は外がおいしい」などの文があるが，前者は「昼にかければ安くなる」の意味であり,「食事は外で食べればおいしくなる」の意味であるように,「が」は，主格と捉えるよりも,「が」と指示した語の内容が述語の内容をもたらしたと考えるべきであり,「空が高い」のときは,「空」が自分に「高い」と考えさせるものをもたらし,「故郷が懐かしい」は「故郷」が自分に「懐かしい」心情をもたらしているのである．「空を高いと見る」のように「を」を使えば，話し手からその物への意識の投影があるのであるが,「が」となると，その物がそれだけでするという意味になるのである．「が」を主格とし,「名詞・が・形容詞」の構文を「主語・が・述語」とする考えが前提になったための誤解である．

ここで,「空」に関する「「高い」と考えさせるもの」と「故郷」に関する

「「懐かしい」心情」が果たして同列に並ぶのかという疑問も浮かぶが，ともかく「懐かしい」が西洋語風の単純な述語ではなく，「自分に「懐かしい」という心情をもたらし」ているという意味に解すべきだという理解には納得が行く．すなわち「故郷が懐かしい」と私が言うとき，「懐かしい」と感じているのは私であり，そう感じさせているのが「故郷」である．これを私の側から見れば，私は「故郷」から，「懐かしい」心情をもたらされている，少し整理して，私は「故郷」ゆえに「懐かしい」という感情をもっている，と言い換えることができる．ここに上で見た「なつかしい」の分析的意味を代入すれば，「X が懐かしい」という文は，「私は X ゆえに，隔たりのある対象 X にあえて触れたい，という感情をもっている」を意味する．なお，この語源的意味における「なつかしい」は隔たりという否定的契機を内包し，その克服を願望するが，未だその願望は成就していない．

ところで，「故郷が懐かしい」の文において，「懐かしい」は「故郷」について言われている．「懐かしい」とは，大抵，何らかのよすがに出会っての発言だろうが，よすがの方ではなく，想起されるもの（故郷）について言われているのである．あるいは，山口の説明に即して言えば，「懐かしい」という感情を「もたらした」のは，「故郷」である．そのとき，よすがは想起の，成就の暁には忘れられるきっかけでしかなく，意識はもっぱら想起された像に向かっている．下の 3.での比較を先取りして言えば，このことは，nostalgia が “nostalgic vanilla fragrance” のように，現前する対象について言われ，その対象の味わいと感じられることと対照をなしている．

2.3.「なつかしい」の語史

『日本国語大辞典』は「なつかしい」の全般的説明として，「〔形口〕㊀なつか．し〔形シク〕（動詞「なつく（懐）」の形容詞化．古くは，身近にしたい，馴れ親しみたいの意を表わし，後世，多く懐旧の思いをいうようになる）」としている．この語が語源的に見ても，過去よりは，むしろ隔たりのある対象について用いられることを，2.1.2.で確かめた．その隔たりが空間的なものから時間的なものに転ずる時期を，同辞典は「中世以後」とし，第二の語義「㊁（中世以後に生じた意味）過去の思い出に心がひかれて慕わしいさ

ま．離れている人や物に覚える慕情についていう．」を与えている[12]．その意味の用例初出として挙げられるのは，光悦本謡曲『羽衣』（1548 年頃）の「雁金のかへりゆく，天路をきけばなつかしや」である．この箇所を岩波日本古典文学大系 41『謡曲集　下』（1963 年刊）から，前後を補って引用する．

> 迦陵頻伽の慣れ慣れし，迦陵頻伽の慣れ慣れし，聲今さらに僅かなる，雁がねの帰りゆく，天路を聞けばなつかしや．千鳥鷗の沖つ波，行くか帰るか春風の，空に吹くまでなつかしや，空に吹くまでなつかしや[13]．

天人が漁夫白竜に羽衣を取られて天に帰れないという嘆きの場面である．これについて校注者横道萬里雄と表章は「天上で聞き慣れた迦陵頻伽の声を今更思い出させるかすかな雁の声，北へ帰るその雁の声を大空に聞くと，一そう天上が懐かしい．」「千鳥や鷗が沖波の上を行きつ戻りつ飛び廻り，春風が空に吹き通うにつけても［一そう天上が懐かしい］．」と注釈している．ここには「懐かしい」とあるが，これを現代的な過去思慕の意に解するのは誤りである．なぜなら，注釈にも「天上が」とあり，また鳥や風が天を思わせると言うのだから，この「なつかし」は時間ではなく空間を対象とする．無論天人は雁の声に，昔聞き慣れた迦陵頻伽の声を思い出しているという意味では過去を顧みてはいるが，思慕の対象は，もはや決して還らぬ過去なのではなく，迦陵頻伽の鳴く現在の天上である．現に，この謡曲では天人はめでたく天上に還りおおせる．

12）『角川古語大辞典』（第四巻，1994 年）でも，「なつかし」の記述の中で「懐旧の情を表す「なつかし」は，平安時代の仮名文学では「五月待つ」「月やあらぬ」（古今集）などの古歌による連想に依存しており，懐旧の意が一般化するのは中世以降と見られている．」とある．

13）日本古典文学大系版では「懐かし」と漢字で表記されているが，『日本国語大辞典』の指示する日本古典全集『謡曲百番　第三』（與謝野實，正宗敦夫，與謝野晶子編，1927 年）では仮名表記である．この版は慶長年間に刊行された光悦本の影印本である．なお，『日本国語大辞典』がこの作品について挙げる「1548 年頃」という年代は，「推定される初演など」（付録の「主要出典一覧」より）を表わす．

次に，『日本国語大辞典』は「なつかしい」の第二義の第二の用例として『日葡辞書』（1603 年刊）の「Natçucaxŭ（ナツカシュウ）ヲモウ」を挙げている．これを土井忠生・南田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店，1980 年）で見ると，見出し語 Natçucaxij に

> ナツカシイ（懐かしい）一所に居合わせない人と人との間で恋しく思う（こと）[1]．
> Natçucaxisa．懐かしさ
> Natçucaxŭ．（懐かしう） 例，Natçucaxŭ vomô．（懐かしう思ふ）恋しく思う．[2] ※原文は 1）*O auer saudades*，2）*Ter saudades*．saudade については Yucaxisa の注参照．

とある．そこで見出し語 Yucaxisa を見ると

> ユカシサ（ゆかしさ）なつかしさ．[1] ※1）原文は *Saudades*．saudade は，過ぎ去った幸福とか，遠く離れた人とかに対する追憶や憂愁を表わす葡語独特の語で，日本語の“なつかしさ”に近い．日西辞書の Desseos，y ahincos や，日仏辞書の Regrets は Yucaxisa（ゆかしさ）からはほど遠い．

と説明されている．ここでの「なつかしさ」は『邦訳日葡辞書』の訳者による現代日本語による説明だから，Yucaxisa は「遠く離れた人」を対象に含みつつも，主として過去への思慕を指していると受け取れる．そしてポルトガル語 saudade がそれに「近い」と説明され，他方『日葡辞書』の原文では Natçucaxij は，直訳すれば「saudades をもつこと（o auer saudades）」と定義されている．念のために図示すれば，

Natçucaxij＝O auer saudades.
しかるに（Yucaxisa＝）saudades≒（現代語で主として過去思慕を意味する）懐かしさ．
ゆえに Natçucaxij≒（現代語で主として過去思慕を意味する）懐かしさをもつこと．

という図式になる．これと『日本国語大辞典』でこの用例に対応する定義「過去の思い出に心がひかれて慕わしいさま．離れている人や物に覚える慕情についていう．」を重ね合わせると，すでに『日葡辞書』の編纂された 17 世紀初頭の時期に，日本語「なつかしい」は，過去思慕を主語義とする現代の用法に変化したと結論づけられそうに思われる．

しかし我々はもう少し注意深く観察しなければならない．『日葡辞書』原文[14]における Natçucaxij の定義は “O auer saudades entre absentes.” である．『邦訳日葡辞書』で「一所に居合わせない人と人」と訳された “absentes” とは，語源となったラテン語 absens の意味からしても，また現代ポルトガル語 ausente からの類推からしても，「不在の」を意味すると考えられる．「不在」とは現在別のところにいることを意味するのだから，“absente” とは「今は余所にいる人」のことであって，過去の人ではない．これの複数形を「一所に居合わせない人と人」とするのは，よく考えられた訳である．したがって，『日葡辞書』の伝える「なつかしい」は過去思慕を含んでおらず，『日本国語大辞典』の定義のうち「過去の思い出に心がひかれて慕わしいさま」ではなく，もっぱら「離れている人や物に覚える慕情についていう」に該当する．

『日本国語大辞典』の用例の挙げる，「なつかしい」の第三の用例「幾年なつかしかりし人々の，さしむきてわするるににたれど」（『俳諧・続猿蓑』上・今宵賦（支考）1698 年）にしても，そこに会した人々は長年離ればなれになってはいたが，今は現に差し向かっているのだから，この「なつかし」は「会いたい」という意味で言われており，やはり過去には向けられておらず，「離れている人や物に覚える慕情についていう」に当たる．ここでも，再会は果たされていることを確認しよう．

それに対し，『角川古語大辞典』の「なつかし」の項目に，狂言『武悪』からの次の用例が掲げられているのは注目に値する．「（亡キ御親父サマガ）まだ仰られた事がござる．何成共いへ，なつかしひに」．これは幽霊に扮し

14） 私の見た影印本は『エヴォラ本日葡辞書（VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM ... ANNO M. D. CIII.）』（清文堂出版，1998 年）である．

た武悪が主君に会って，地獄にいる主君の父親からの伝言を伝える場面で，「何成共いへ，なつかしひに」は，「まだ仰られた事がござる」と言う武悪への主君の答えである．この「なつかし」は「不在の人に会いたい」のではなく，もはや取り返しのつかない過去への思慕を表わす．なぜなら，地獄行きへの誘いを断わるという劇展開からもわかるとおり，主君は幽明両界の別をはっきり意識しており，父親は決して手の届く存在ではないことを了解しているからである．したがってこの「なつかし」は現代語の「懐かしい」と同様に過去思慕を意味する．

この劇展開は「なつかし」の意味変化を象徴的に示している．すなわち，たとえば『羽衣』では，天人は漁夫の願いを聞き入れることで，「なつかし」い天上に還ることができたのに対して，『武悪』では「なつかしひ」父親にこの世で会うことはもとより叶わない．つまり過去思慕としての「なつかし」には，不在者への思慕におけるような現実の再会の希望は，原理的に絶たれている．言い換えれば，不在者への思慕は現実界での事態や行為に還元され得るのに対して，過去思慕はあくまでも想像界にしかあり得ない．したがって，思慕の対象として，空間的に隔たったものから時間的に隔たったものへの転移は，「なつかし」概念の範疇的な変化を意味する．

ただし，この「なつかし」がどの年代まで遡れるかは定かではない．と言うのも，狂言の流派ごとに異なる諸本のうち，これを伝えているものとそうでないものがあるからである．結局，確かなところとしては，『角川古語大辞典』が典拠とした大蔵虎明本の刊行された 1642 年とするほかないが，この本が「室町時代から江戸時代初期にかけての狂言，また，当時の国語の実態を知る貴重な資料」[15] であることも確かであろうから，結論として，『日本国語大辞典』がこの作品の年代とする「室町時代末〜近世初」が妥当と思われる．

15）池田廣司・北原保雄著『大蔵虎明本　狂言集の研究　本文編』上巻，表現社，1972 年，p. 1.

2.4.「懐かしい」という漢字表記

これまで,「なつかしい」を専ら和語の面から見てきたが，次に，これが「懐かしい」と漢字表記されることの意味を考えよう.『日本国語大辞典』の「懐かしい」の項によれば,「懐敷」と,「懐」の字を使って表記する辞書上の初出は室町中期の『文明本節用集』で，それより前の 1177〜1181 年に成った『色葉字類抄』では「愛褻」と表記されている．また『文明本節用集』の中で,「懐敷」と並んで「馴思」,「仮顔」,「婷・潜」なる表記も見出されるようで，室町時代中期では未だ「懐」の表記が不安定であったことをうかがわせる．そもそも考えてみれば,「馴思」などは「なつく」という語源から思いつきやすく,「愛褻」にしても「褻」は意味上「馴れ」に近いので，自然な連想と考えられるのに対し,「ふところ」「いだく」などと訓ずる「懐」は，直ちに「なつかし」に結びつきそうには思われない．現に,「懐古」「懐旧」「追懐」など「なつかしい」に相当するような熟字において，過去思慕を表わすのは「懐」と組み合わされた「古」「旧」「追」の方であって,「懐」の字そのものではない．このように「なつかし」と「懐」とは比較的遠い関係にある以上，両者の結合はある特定の筋道で生じたとしか考えられない．

ところで『日本国語大辞典』によれば,「ふところ」にはすでに前出の『色葉字類抄』（1177〜1181 年）から,「いだく」には『和玉篇』（15 世紀後期）から,「懐」の字が当てられていた．つまり「なつかし」に「懐」が当てられ始める時に，この漢字は「ふところ」,「いだく」という意味で理解されていた．したがって，この時代の日本人は，意味上「ふところ」,「いだく」に類する語として「なつかし」をとらえていた．要するに,「なつかし」とは，両腕で抱えて胸にぴったりと当てる身体動作で表象される感情であった．そしてこの動作は，対象を直(じか)に，そしてしみじみ感じる態度を表わしているから，そこから生じるのは，まさに感性的質である．もちろんこの動作は，やはり古くから「懐」と表記された「おもふ」にも共通することで，中世以降の人々の思惟一般に当てはまる表象である．つまり,「懐ふ」の漢字表記は，思惟内容を想像上両腕で胸に押し当てる身体行為に通じる．しかし中世のある時期に「なつかし」に「懐」が当てられ始めてから，次第にこの表記が定着し，明治時代には排他的結合を成し遂げたのに対して,「おもふ」に

ついては「思」「念」「憶」「想」などの字が「懐」とずっと平行して用いられ，明治以降はむしろ後退している．この事実は，思惟の中でもとりわけ「なつかし」に，この身体動作がぴったり当てはまると感じられたことを意味している．

逆に，似た意味の語をいかに漢字表記したかを調べることで，「なつかし」と「懐」の結びつきの重みを測ることにしよう．さきほど，『日葡辞書』で同じ saudades の訳語が当てられているのを見た「ゆかしい」がそれである．この語は「行く」から派生し，「行きたいという気持ちを起こさせる」という意味で，「なつかしい」と語構成の上でも近く，また過去に心惹かれるという意味で『日本国語大辞典』に収録されている最も早い用例は 13 世紀前半の『平家物語』であって，時期的にも遠くない．このように共通点の多い二語ではあるが，「ゆかしい」を「懐」で表記する古辞書は，これも『日本国語大辞典』によれば，明治時代の『言海』だけで，それ以前の辞書では「床敷」などの漢字を当てていた．つまり中世，近世の日本人は，心惹かれるという気持ちに，想像上両腕で胸に押し当てるという身体的表象を与えなかった．おそらく「行く」という純粋空間概念にこの動作がなじまなかったからであろう．なぜなら，「行く」とは，想像上にもせよ，私と対象が同じ空間内で，等身大で出会おうとすることを意味するのに対して，両腕で胸に押し当てるには，対象を想像上別尺度の空間に置き，腕に収まる大きさに縮小する必要があるからである．すると，「なつかし」が「懐」の字と結びついたのは，この語の非空間性ゆえであると考えられる．このように，「なつかし」と「懐」の結びつきは，中世以降の日本人が，想像上両腕で胸に押し当てるという身体動作を，非空間的な「なつかし」の最も適切な表象法として積極的に選び取った過程を表わす．

では非空間的な「なつかし」とは何か．文法的解析から明らかになったように，「なつかし」は隔たりのある対象にあえて触れたいことを意味するが，非空間的なもののうち，力や身分の上で隔たった人や物に，「想像上両腕で胸に押し当てる」ようなしかたで触れようとするのは奇妙である．なぜなら，そのような人や物は自分より大きな存在と感じられるがゆえに隔たりを覚えるのに対して，身体動作は上で見たように，縮小を前提とする．すると唯一

残った可能性として，その対象とは，時間的に隔たった人や物なのではないだろうか．とすれば，「懐」の字を当てることは，「なつかし」における思慕の対象が過去のものに転移したことを意味することになる[16]．先ほど 2. 3. で『武悪』からの用例について見たように，過去思慕は想像界に属するのであった．これは「懐」の字が表わす動作の想像性と一致する．また，想像界のものは縮小を受け入れる．さらに，現在どこかにある（いる）不在者なら，ただ想像上で思慕するだけでなく，再会の実現の道を考案するなり，少なくとも未来の再会を想像するなりするのが自然というものではないだろうか．

歴史的に見ても，「懐」の字を当てる辞書初出の「室町中期」は，「なつかし」が懐旧を意味し始める室町時代末から近世初めという時代にほぼ一致する．ここから，「なつかし」の思慕対象が過去に転移したことと，「懐かし」の表記とは重なると結論しよう．

3. 懐かしさと nostalgia の比較から感性史を編む

3. 1. 比較美学的考察

これまで，nostalgia と懐かしさの成り立ちと変遷を別個に辿ってきた．すでに仄見えて来たように，両者にはかなりの共通点と，それゆえに顕わになる相違点とがある．それを明らかにし，そこから得られた一つの透視軸から両概念の見取り図を描くのが，本節の目的である．そのため，まず 1. と 2. の考察から取り出される概念構造を見よう．

16） ただし，『日本国語大辞典』の「なつかしい」の説明の始めに注記されているように，この語は「後世，多く懐旧の思いをいうようにな」った．逆に言えば，現代でもこの語は，過去ではない現在のものへの「慕情」をも表わす．そのことは，「そとなつかしい」「ひとなつかしい」のような合成語にはっきり見て取れられる．そもそも，これらの合成語にしても，何らかの過去の体験が踏まえられているわけであろうから，「懐旧の思い」と無縁なわけではない．ここで「転移」と言うのは，相対的傾向のことである．

3. 1. 1. Nostalgia

Nostalgia は第一段階における望郷苦から，第二段階における快苦入り交じった過去思慕を経て，第三段階における現前対象の快い味わいへと語義変化を辿った．これは辞書から確かめることのできる歴史的事実である．ではこの事実は何を意味しているのだろうか．

（ア）Nostalgia 概念において，故郷と過去はつねに思慕の対象である．そしてこの概念は，一方で，現実において故郷または過去から引き離されていることの苦と，他方で，想像において故郷または過去と出会っていることの快という二つの契機を必然的に孕む．第一段階では苦のみがあり快が欠如しているように見えるが，この苦は単なる艱難そのものというより，帰郷の快の阻害ととらえられるゆえに一層激烈に感じられるのだろうし，第三段階の快感情も，久しぶりに過去のものに出会ったゆえの喜びなのだから，普段はそれに出会えない苦痛を構造的前提としている．すると三段階の移行は，現実上の離別と想像上の邂逅とに跨りながら，現実認識を重視する態度から想像を重視する態度への，重心移動とまとめることができる．

（イ）Nostalgia の第二段階で，思慕の対象が空間概念である故郷から時間概念である過去へ転移した．言うまでもなく，故郷は（大抵は）まだそこにあり，過去はもはやどこにもない．なるほど，異郷にある人が故郷を想うとすれば，それは必然的に過去の姿であるから，ここに過去の時という契機は含まれている．しかし望郷の念は，故郷が依然そこにあることを前提としている．したがって故郷思慕は現在の存在に向かう．それに対し，過去思慕とは，現実には決して存在し得ないものへの憧れである．だからこそ，想像力が動員されることになるのだが，その想像が現実になることはないのだから，過去思慕とはそもそも絶望的な，矛盾した企てである．知性はこの企てを解することができず，割り切れなさが残らざるを得ない．それを引き受けるのが感性である．感性はこれを消化して，第二段階ならば快または苦に，第三段階ならば快へと分解する．つまり，思慕の対象が過去に転移する際，nostalgia は感性の領分に移るということである．

（ウ）第三段階の nostalgia は，“that nostalgic vanilla fragrance” のように，現前の対象に存する．対象は鼻歌の場合と同様，客観的には想像力を

載せる台でしかないとしても，意識は想像の向かう先（過去）ではなく，その台にとどまり，想像という荷を台と一体の味わいとして受け取る．

3.1.2. 懐かしさ

（あ）「私はXがなつかしい」という文は「私は，隔たりのある対象Xにあえて触れたいという感情を持っている」を意味するが，それに「懐」の字を当てることは，その対象Xを想像上両腕で胸に押し当てるという表象を意味するのであった．つまり和語の「なつかし」が，隔たりという否定的契機を前提とし，未だその実現を意味しなかったのに対して，「懐かし」は「あえて触れたいという感情」の想像上の実現を含意している．なぜならば，何かを想像上この両腕で胸に押し当てるということは，それをここにあるものとして具象的に想像することを前提とするからである．結局「懐かしさ」とは，対象が現実にはここにないことを嘆く否定的な感情と異なり，想像上とは言え，ここにあることを喜ぶ明るい肯定的な思いである[17]．

（い）2.4.で結論づけられたように，「なつかし」の過去思慕性と「懐」の字の表わす身体性と具象性は一体のものであった．ところで，身体性と具象性とは，感性の機能と対象の性質であるから，過去思慕としての懐かしさは感性的性質を持っている．

（う）「あの頃が懐かしい」において，懐かしさは，その思いを喚起する現前のものにではなく，想像の向かう先である「あの頃」に存する．しかしそれは，（あ）で見たように，あたかもここにあるかのようにとらえられている．そして（い）で見たように，懐かしさが感性的質でもあるなら，それはあたかもここに現前する想像物の味わいであることになる．

17） 2.3で見た『邦訳日葡辞書』のsaudadeへの注記で，これが「憂愁」を含むとされていた．ポルトガルの大衆歌謡ファド（fado）でsaudadeが好んで主題とされることからもわかるように，saudadeは一種の甘美な感情であるだろう．しかしこれはおそらく，対象の不在を感性的にとらえることの甘美さであって，想像上の現前を喜ぶ「懐かしい」の場合とは異なっている．

3.1.3. Nostalgia と懐かしさの共通構造

こうして見ると，nostalgia における（ア）（イ）（ウ）の構造と懐かしさにおける（あ）（い）（う）の構造に多くの共通点があるのは明らかである．まとめれば，

（1） 両者とも，現実界における不在の苦と想像界における現前の快とを両端とする線上に跨りながら，ある時期から後者の側に重点を置くようになった．

（2） 両者とも，思慕の対象が空間的なものから時間的なものに転移するにつれて，感性的性格を帯びた．

（3） 両者とも，現前するもの，あるいは現前すると感じられるものの味わい，言い換えれば感性的質である．

3.1.4. 両概念の差異

しかし他方で，両概念には差異も見られる．

（1’）nostalgia は快苦の線上を苦から出発して徐々に快の側にたどり着いたのに対して，「懐かしい」においてはそもそも苦の要素が表立ったことはなかった．

（2’）重点移動の時期が，nostalgia の場合，20 世紀初めであったのに対して，「懐かしい」は中世以降と，かなり早い．

（3’）両者とも何らかのしかたで現前するものの感性的質の一つであることは共通するが，そのありかが現実界か想像界かという点で異なっている．その結果，質としての定性差は幾分異なっている．すなわち現実界の現前物の質である nostalgia は，対象にもう一つの像を重ねることから生じるわけだから，実在に比して表象が必然的に過大になる．この超過の内容とは，想像の内容であって，実在界における過去の不在の苦と想像界におけるたまさかの出会いの喜びという感情を含んでいる．すると精神は，ここで感情過多の状態に陥っている．*OED* で nostalgia が “sentimental” と性格づけられているのは，まさにこの点を指している．なぜなら，sentimental（感傷的）とは，対象とそこから喚起される感情との不釣り合いの謂いだからである．したがって，懐かしさとの比較における nostalgia の定性差は感情過多にあ

る．それに対して，「懐かしさ」では，現前物は単なるよすがとして意識の中では背景に後退しているので，そもそも実在と表象の関係が問題になることはない．むしろ想起される対象の想像的具象性が強いために，葛藤の少ない，純度の高い快である一方，その快が現実との関与の薄さに由来することから，夢想性が表に立っている．これを，nostalgia との比較における懐かしさの定性差としよう．これに，過去を味わいの対象とすることから生じる正の感性的質という共通内包を加えれば，両概念の内包が完成する．すなわち，懐かしさとは，過去を夢想的に味わうことから生じる専ら快なる感性的質であり，nostalgia とは，現在を過去と二重写しにして感情過多的に味わう感性的質である．

なお，付随的なことではあるが，“nostalgia” を「懐かしさ」と訳してよいのか，という問題についても触れておこう．これは上の定性差を本質的差異と見るか．それとも微細なニュアンスの差のようなものと見るかの違いである．私としては，過去を味わいの対象とするという共通点こそが本質的であることと，“nostalgia” が意味上「懐かしさ」に急速に近づいてきた近年の動きとを重視して，この対応づけは正当であると言いたい．

このように，異なる言語におけるあい似た概念を比較することで，概念の共通構造が明らかになるとともに，個別に見るより一層明確にそれぞれの概念の特徴を探り当てることができる．これが比較美学の効用である．

3. 2. 感性史の可能性と意義および方法

だがここでの我々の経験がさらに教えるのは，こうして導き出される結果が，その言語を使った人々の，少なくとも文書に書き残した人々の，感性の歴史を描き出す可能性があることである．たとえば nostalgia について 1. 2. で見たように，19 世紀までの英語圏の人々は過去を思慕の対象として意識することがなかった．したがって，眼前のものを過去と二重写しにして味わうという感性の働きも有しなかった．これは現代の我々にとって，とりわけ「懐かしい」という感じ方が当たり前のように染みついている日本人にとって，驚くべきことではないだろうか．ここに，感性の歴史を編むことの可能性と意義がある．しかしそれについて考える前に，懐かしさと nostalgia に

関するこれまでの検討結果が，感性の歴史の点でどのようなことを意味するかをもう少し見ておこう．

現代の懐かしさも nostalgia もともに，現実の不在の苦よりも想像上の現前の快に重点がある．これは現実認識よりも非現実の想像をこそ，経験の実質と受け取るようになったことを意味する．無論ここから直ちに両概念について，我々の経験の場が現実界から想像界へ転移したと結論づけることはできない．なぜなら，nostalgia とは，現実の事物を過去の像と二重写しにすることから来る味わいだからである．しかし，現にここにはない過去の像を，味わいという経験の対象に含めているのもまた確かなことである．したがって，懐かしさと nostalgia についてだけだが，現代において，想像力が知性より重要性を増していると言える．これは英語圏の人々と日本人に共通しているが，その始まりの時期は日本人の方がはるかに早い．それに対して，英語圏の nostalgia では，第一段階から第二段階への移行が 20 世紀初めに生じてから，第三段階への移行はかなり速い変化を示している．

Nostalgia について言えば，この語は精神疾患から正の感性的質への語義変化をたどった．別の機会に行なった調査によれば[18]，delirious, schizophrenic, hysterical など，もともと精神異状を表わすほとんど英語の語にも同様の現象が見られるので，精神疾患が一般化するに伴って正の感性的質に転化するという，感性に関する一般則にまとめることができる．これは個々の語がいつから感性的質を意味し始めたかという歴史の一部をなすとともに，精神疾患の未来の姿を予想させるものでもある．

次に，懐かしさと nostalgia における思慕の対象が空間的不在者から過去へ転移したことは，「行きたい」「会いたい」という，次の行為に結びつく可能性のある感情から，純粋な味わいとして完結したものへ向かって両概念が変化したことを意味する．これは知性的認識から感性的判断への変化に当たる．やはりきわめて局限された範囲でしか妥当しないが，この変化は，現代が感性の時代であることと符合している．

繰り返し強調しているように，この結論の妥当性はきわめて狭い．しかし

18） 注 4 で言及した 2009 年度美学会全国大会での口頭発表.

同様の事例を積み上げていくことで，日本語圏人の感性史，英語圏人の感性史と言えるものが徐々に形成されていくはずである．それは美学史と違って，特定の哲学者による整理や体系化を受けない，人々の生(なま)の感じ方の変遷である．無論，「人々」とは言っても，文献を手がかりにする以上，後世に伝えられるほどの文章を残した人たちに限られていて，庶民の感じ方ではない．ただ，文化の担い手という点から見れば，この限定も一定の正当性を要求できるだろう．

最後に感性史の方法と意義について考えよう．今回の試みでは文法書と，日本語に関しては『日本国語大辞典』，『角川古語大辞典』，英語に関しては *OED*，*Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary* のような歴史的辞書を主として参照した．文法とは，当該言語の発話に普遍的に妥当するはずの形式であり，歴史的辞書とは発話内容の体系的記録であるから，この両者を使うことで，歴史的発話を網羅的にとらえることができるはずである．無論どちらも完璧ということはあり得ないので，盲信は慎むべきであるとしても，現代の知的達成を体現しているのは確かであろう．したがって，文法書と歴史的辞書は，歴史的発話を概観するための主要な道具である．

本稿で我々が採ったのは，言語における語義変化を手がかりに，感性の変化を探る方法である．このほかにも，芸術作品から，社会現象からなど，いくつもの接近法があるだろう．たとえば，文学や絵画において過去思慕がいかに表象されているかを探ることは，実り多い方法であると考えられる．その中で，我々の方法の特徴は，資料そのものの網羅性と客観性がかなりの程度保証されていることに加え，我々が現に対象をつかむその言葉を扱うことの直接性にもある．語が一定の意味を持ってそこにあるということは，感性がその語義によって一定のとらえ方へと誘(いざな)われていることを意味する．Nostalgia の場合で言えば，我々の感性が，眼前のものを，失われた過去の像と二重写しにして見るという働きを，自動的なものとして身につけたということである．この働きは言語に媒介されている以上，一般的なものであり，人々の感性の働きと言ってよい．あらゆる歴史と同様，我々はそこから，自分の感性の働きを立体的に見直し，相対化し，未来の予測に役立てることができるようになるだろう．あるいは直接に過去の例から学ぶところがあるだ

ろう．

感性史はまた，言ってみれば時代の平均値を明るみに出すことで，芸術家がどの方向にどれだけ立ち上がり得ているのか，またその際どのような抗力にどの程度立ち向かわなければならなかったのかについて，一つの洞察を与えるだろう．そこから，同時代の人から見た芸術家の像について，あるいは逆に芸術家自身が人々にいかなる姿を呈しようとしていたかについて，我々の理解を深めてくれるかも知れない．同様に，美学理論についても，それが人々の感性の変化をどのように，どこまでとらえようとし，とらえ得ているのかに，一つの解釈材料を提供してくれるだろう．要するに，感性史は，芸術史や美学史の基礎としても役立つはずである．